俺は、テロリスト？

NでＨなＫ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
俺は、テロリスト？

【Ｎコード】
Ｎ０４９５Ｈ

【作者名】
ＮでＨなＫ

【あらすじ】
夢道化師・・・戦争の道具。夢を作る仕事。永沙幸介・・・夢道化師。平和な日常に飽きた幸介の前に、英雄銀閣が現れる。それは、日常の崩壊の始まりだった。

Ｃｈａｐｔａｒ１～雨は降り始めた～（前書き）

かなり分かりにくくなっていると思います＾＾；
１－１であることをご了承ください。１－２・・３と続いて分かるようになっています・・・はずですｗ

Ｃｈａｐｔａｒ１～雨は降り始めた～

法とモラルが制御する弱肉強食の世界。矛盾した世の中で、正義とは何なのか？

審判戦争から一年余り、軍は解体され、俺たちは普通の学生として過ごすことを許された。

しかし、人は争いを好み、求め、何かを失うまで気づかない。俺は、何を失うのだろう。

Ｃｈａｐｔａｒ１－１～雨は降り始めた～

昨日となんら変わりない今日この頃、授業も面倒で窓から外ばかり見ていた。暇だな。

放課後になっても、することは無く。ただ、時間を潰しているだけ。

審判戦争時、名を馳せた夢道化師。夢を作る道化師が、こんなんじゃいい夢も見せられないな、と心の中で苦笑する。

空いて久しい机と椅子を見る。音無銀閣、行方不明の英雄。審判戦争終結の要となった黒き英雄。数週間前に行方を暗ましたまま連絡も無く、連絡も取れずにいた。

審判戦争の１年、死をも経験したがあの時の俺は満たされていた。

銀閣、お前はまたあそこにいるのか？

何も満たされぬまま平和を過ごす。俺が嫌いなのは、多忙と閑暇と不変だ。今は、閑暇と不変が揃ってしまっている。

「あれ、コースケじゃん」

放課後、駅前の喫茶店でコーヒーを啜っていると、クラスメートの藤堂紅葉と瀬良野葉月がやってきた。彼女らも、審判戦争を共にした仲間だ。

「席、いい？」

「ああ」

テーブル席に一人座っていた俺の向かいに2人は座る。1年間も一緒に居た訳だが、俺も年頃の男子だ。こうしていると、妙に緊張してしまう。

大した話題も無く間が空いてしまう。何か切り出さなくては。

迷った末に出したのは、銀閣の話題だった。

「銀閣の奴、今頃どうしってかな？」

銀閣の名前を口に出して、気づいた。

葉月が、急に元気を無くした様に俯き、ただコーヒーをかき回す。小さな眼鏡っ子、そんな外見に余計暗く見えてしまう。

「音無君、元気にしているかな？・・・」

紅葉が、睨んでくる。普段は可愛いポニーテイルが強い女性をイメージさせる。「全く、鈍いわね」と目が訴えてくる。銀閣はＮＧワードだったらしい。

「銀閣のことだ、どこかで一匹狼をやっているさ」

フォローをしおうとしたが、的を大きく逸れてしまったらしい。

慌てふためく俺に、救いの天使が舞い降りた。ＰＬＤの着信音が鳴る。メールだ。

「銀閣からだ・・・」

「えっ！」

普段はスローな葉月が、異常は反応を見せる。

『仕事を終え、戻ってくることが出来た。荷物が多いんだ。手伝ってくれないか？渡門神木で待つ』

「渡門神木で待ってるってよ。行こうぜ」

渡門神木は、駅の大きな木の円柱だ。ここからは、歩いてもすぐ着く。

俺と同じ城ヶ崎高校の制服を肩に掛けた銀閣は、渡門神木に背を預けて待っていた。あれ、荷物と言ってもキャリーバック一つじゃないか。

「久しぶりだな」

「高が３週間だ」

これぞ、銀閣。何を言っても冷たく返してくる。

「てかよ、手伝ってくれっていうもんだから来たのに・・・それ一つじゃないか」

「何も荷物が、今目にみえている物とは限らないだろう？」

「？」

葉月は、意味が分からないといったようだが、俺は審判戦争時にはいつも銀閣と組んでいたのだ。この謎掛けのような台詞を理解した。

「・・・何がある？」

「時が来れば分かる」

目の前のスクランブル交差点の信号が青になった。大勢の人々が行き交う。

学生、サラリーマン、ＯＬなど日常変わりない風景だ。しかし、銀閣は真剣な眼差しで見つめる。

行き交う人々の中で、黒スーツの男性が手を挙げた。その手には、拳銃が握られている。

響き渡る銃声、足を止める人々。信号機の音だけが、静かに流れる。

俺は、息を呑んだ。最悪の事態を想像してしまったからだ。

紺色のスーツを着た男性が倒れる。じわじわと広がる赤い水溜り。

ソレが何を意味するかは、そこにいる誰もがよくわかった。

「死にたくなければ、逃げろ。まぁ、こいつらからだけどなぁ？」

黒い化け物が現れては、人々を襲い、喰い殺した。

人々は、パニックを起こし、蜘蛛の子散らすように逃げ惑う。

どんなに走って逃げても、化け物からは逃げられない。すぐに追いつかれ喰われてしまう。

「ぎんか・・・」

横を見たときにはもう、銀閣の姿は無かった。

飛び出した銀閣は、大きな剣を2本構え黒スーツの男に襲い掛かった。

「来たな、死に底無いがぁ！」

人混みの中から同じ黒スーツを着た男たちが、剣を銃を構え銀閣に襲い掛かる。

「音無君！」

銀閣は、十数人の敵を相手に大きな2本の剣を器用に操り闘い抜く。

「荷物ってこれかよ！」

俺も、戦闘に参加する。銀閣が、言いたいのは・・・。この化け物を掃除しろってことか！

「行くぜ・・・。＜破運＞のゲットウ！」

俺は、無垢な心の名前を呼ぶ。無垢・・・イノセンスと呼ばれる思念の力。思いを具現化し闘う。それが、俺たち夢道化師の能力。

宙から降って来た、二刀一対短剣を取り化け物に切りかかる。

「なっ。硬い！？」

戦車の装甲をも切り裂いた俺の短刀は、全く意味もなさなかった。簡単に弾き飛ばされる。

「平和ボケし過ぎじゃないのか？」

これだけの数を相手にしながら銀閣は余裕で言葉を掛ける。

銀閣は、剣を受け流し切り返す。降り注ぐ銃弾を剣を振り回して防ぎ、宙を舞って避ける。

隙間無く繰り出される連携プレーだが、銀閣には掠り傷一つ付け

られない。

銀閣の動きに見とれているうちに、逃げ遅れた幼い子供が化け物に襲われていた。

ここからでは、間に合わない。いかし、今助けられるのは俺だけだ。

「春夏秋冬・・・秋！」

“風雅様相！！”

超高速移動をした俺は、一瞬で化け物に追いつき、縦に両断して子供を助けた。

「大丈夫か？坊主」

「うん。ありがとう、お兄ちゃん」

子供の母親が歩道の隅で泣き崩れていた。子供を抱え母親ものもとに送る。

「ふん。遅いぞ」

「ちんたらやっている人に言われたくないね」

銀閣は、不敵に微笑むと剣を持ち直し、構えを変えた。

「月陰ル剣技・・・」

“展映月！”

銀閣が、大きく剣を振り下ろすと辺りを衝撃が襲い黒スーツの男たちを吹き飛ばす。

「手加減はしたさ・・・。さぁ、吐くもん吐いて貰おうか」

「ふん。お前には何も出来ないさ」

黒スーツの男は、懐から取り出した錠剤を呑み込んだ。

「・・・」

それ以来、男が喋ることは無かった。即効性の高い毒薬だったらしい。これだけでも一つ分かることがある。

何故、自殺したか。情報を漏らさないため。組織に属しているということだ。

「だが、ワケが分からない」

俺は、銀閣に問うた。

「あの化け物は何だ?それに、こいつらは?」

「話せば長い。それに、今はやるべきことがある」

「コースケ、生きている人もいる。病院に運ぼう」

紅葉が、怪我をした人たちに寄り添う。そうだな、優先すべきは目の前のことだ。

Ｃｈａｐｔａｒ１～雨は降り始めた～（後書き）

誤字脱字あれば、連絡ください。
教えて君かもしれませんが、アドバイスとうあればお願いします＞
＜

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0495h/

俺は、テロリスト？

2010年10月28日08時14分発行